



外国の飲食店

皆さんは外国に行ったことがありますか。

皆さんが行った先の国の言葉が話せたとして、その国の飲食店に入店し、店員さんにその言葉で声をかけた時、店員さんはどのように反応しましたか。

今回は、私がドイツ人の友達と一緒に東京の飲食店に行った時に感じたことを書きたいと思います。

ある日、友達のマーティンさんと一緒に東京に行きました。東京駅に着いたのは、お昼の1時過ぎ、私たちは疲れていて、お腹が空いていました。

「マーティン、残念ながら、日本ではランチタイムの時間が過ぎると多くの店がディナーの準備のため一旦店を閉めてしまうんだよ」と私が伝えると、「行ってみないと分からないから行ってみよう」とマーティンが言いました。しかし、私が言った通りに、ほとんどの店が「準備中」となっていて閉まっていた。それでも古くて高いビルの8階に営業中のタイ料理レストランを見つけ、やっとご飯が食べられることを嬉しく思いながら、エレベーターに乗り込みました。エレベーターのドアが開くと、そこはもうお店の中でした。

「すみません!」と私が大きい声で呼びかけると、店の奥から店員さんが出てきて、外国人の私たちをビックリした様子で見えていました。

私が「今、やっていますか?」と聞いたところ、「あの一、no...えーっと、今no...、えーfoodダメ...」と店員の方が言いました。

私は日本語で質問をしたのに、店員さんが日本語と英語を組み合わせて片言の言葉で返事することに驚きましたが、店員さんの言いたいことが分かったので「ありがとうございます。すみません」と言って店を出ました。

その後すぐ近くに営業中のレストランを見つけ食事することが出来ましたが、先程の店員さんの片言の返事が私には不思議で頭から離れません。多分、外国人=英語と言う強いイメージと外国人と接する機会があまりないので、とっさの反応で片言の言葉が出たのだらうと思います。

私は、国際交流員として任用されていますので、外国人や外国語に触れる機会、色々な交流を通して浦添市民の国際交流の架け橋になればと思います。

Restaurants in Foreign Countries

Have you been to a foreign country? Were you able to speak that country's language? How did the workers at a restaurant you went to react when you spoke in their tongue?

This time, I want to tell you about the story of the time I went to a Tokyo restaurant with my German friend.

About 2 years ago, my friend Martin and I decided to go to Tokyo. When we arrived at Tokyo Station, it was already later than 1 o'clock and we were tired. And hungry.

"Martin," I said, "I'm sorry to tell you this, but in Japan, most restaurants close after lunch and don't open again until dinner time. It's called 'Preparation Time.'" To which Martin said, "Really? Well we won't know which are closed unless we go and check, will we?"

Nevertheless, most of the restaurants that we passed by had 「準備中」("junbichuu") signs posted in their windows, signaling to us that they were closed. Eventually though, we saw a Thai restaurant with an 「営業中」("eigyouchuu" meaning "Open") sign posted. The restaurant was on the 8th floor of a tall, old looking building and so, excited about the prospect of food, we hopped on the elevator and rode it to the 8th floor.

When the elevator doors opened, we were already in the restaurant. I called 「すみません!」("sumimasen" meaning, "excuse me") into the store and waited. No sooner had the words left my mouth than a small woman came rushing in from the back of the store, but stopped cold in her tracks, surprised by the presence of two large foreigners standing in front of her. In order to break the silence, I asked 「今、やっていますか?」, to which the restaurant worker said, "あの一、no...えーっと、今no...、えーfoodダメ..."

Even though I had asked my question in Japanese, this person had decided to respond with a mixture of Japanese and English. Regardless, Martin and I understood that she was trying to tell us that this restaurant too, was actually closed; accordingly we thanked her and took our leave.

In the end, we found a place that was actually open and had a delicious lunch, but the strange interaction that I had just had with the woman from the previous shop was still fresh in my mind.

I think that, for many Japanese people, it is kind of a rarity to have direct contact with foreign people, and so from their point of view: foreigner=English speaker. So, even though I spoke to her in Japanese, she probably did not actually register it that way.

I see this job as Coordinator for International Relations as an opportunity to bridge that same sort of gap between foreigners and locals, English and Japanese, right here in Urasoe City!



きんじょうなおか
金城 直孝ちゃん(0歳)屋富祖在



くれや れい
呉屋 玲ちゃん(0歳)仲間在



しまぶくろはると
島袋 晴多ちゃん(0歳)内間在

「てだっ子STUDIO」写真募集

●日頃の子どもの写真を郵送または画像データをメールで毎月月末までに送付してください。

窓口へ直接提出も可。集合写真は不可。

※被写体の子ども(ふりがな)・年齢(0か月,1歳など)・居住地区(安波茶・伊祖など)一言コメントの記入を忘れずに!

〒901-2501 浦添市安波茶1-1-1

浦添市役所 国際交流課

☎876-1234(内線2613・2614)

E-mail:kokusai@city.urasoe.lg.jp

ハイサイ こちら市長室!

「利他のこころで」

私には三人の子どもがいます。高校生一人に中学生が一人、注文を言い出せばきりがありませんが、幸いみんな元気に成長しているの、これだけでも実にありがたいことです。

子どもの病気ほど親として苦しいものはありませんが、できることならば変わってやりたいと思うのが親心というものです。「娘に沖縄の青い空と海を見せてあげたい」と願う両親が浦添にいます。その娘さんの名は「翁長希羽」ちゃん、まだ一歳の女の子です。彼女は心臓の重い病気を「拡張型心筋症」を患い、現在、大阪の国立循環器病研究センターにて治療のため入院中です。お母さんの実家・熊本県で誕生して以来、まだ沖縄に帰ってきたことはありません。

血液を送り出すことができない難病で、今は補助人工心臓が希羽ちゃんの名をつないでいます。残念ながら現在の医療技術ではこの病気を治すことができず、心臓を移植すること以外彼女が元気になる方法はなく、一日でも早く心臓移植を受ける必要があるのです。ところが、海外での心臓移植手術は健康保険などの公的な援助がなく、高額な治療費に加えてチャーター機を使った渡航費や現地での滞在費を合わせると、個人では到底賄えないほどの膨大な費用が必要になります。そこで、希羽ちゃんのご両親と親交のあるみなさんで「のあちゃんを救う会」を始めています。浦添市としてもできる限りのお手伝いをしたいと考えています。

お問い合わせ 秘書課
☎876-11234
(内線2563)



のあちゃんに心臓移植を!

http://noanaga.com/

「のあちゃんを救う会」ホームページ
女の命を救いませんか? 飲み代やタバコを少し我慢して、コーヒー一杯分でも構いません。私たちの心を広く集めて、希羽ちゃんとその家族の笑顔に変えてみませんか? 希羽ちゃんが元気に沖縄へ浦添へ帰って来るその日を心待ちにしながら。



浦添市長
松本哲治

文化課発信 うあむー ありんくりん 第7回

～歴史を感じられる空間づくり～

文化課は主な仕事として遺跡の発掘調査や史跡の復元整備を行っていますが、時にはまちづくりに直接関わることもあります。今回は経塚の歩道に施した石畳の舗装についてお話をしたいと思います。

浦添市内には中頭方西海道と呼ばれる歴史の道が通っています。中頭方西海道は首里城を起点として浦添を通り、宜野湾・北谷を経て読谷へと至る道で、琉球王国時代の幹線道でした。かつて首里から浦添までの道のりは石畳道でしたが、現在ではほとんどがアスファルト敷きになっています。そこで文化課では経塚の歩道に石畳の舗装を行いました。

工事にあたっては、本物の石畳道に似せるため、一つ一つの石の形について職人さんとイメージのすり合わせを行い、時には作りなおしていただくこともありました。

このような整備は、先人から受け継いだ歴史遺産を再生させる史跡の復元整備とまではいきませんが、生活をしながら自然と歴史を感じられる場を創り出そうとしたものです。

11月3日文化の日には『「尚寧王の道」をたどる』と銘打ったウォーキングイベントの開催を予定していて、今回紹介した経塚の石畳舗装道もコースに含まれています。暮らしの中に息づく歴史の断片を感じられるイベントに参加してみませんか。



▲経塚の石畳舗装道



問い合わせ 文化課 内線6214・6217